
ペルンス

シリウス

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルンス

【Nコード】

N4183D

【作者名】

シリウス

【あらすじ】

物語の舞台は地球から144光年離れたところにある惑星『セイピ』のペルンスという国。そして、ペルンスに住む赤い髪の王女ルビン、ルビンの友達でロック少女レイン、またどういうわけかセイピで住んでいるユウシエン、カズシエンの物語です。

世界への入り口（前書き）

最初は、よくわからないところがあるかも知れませんが（なぜ、ユウシエン、カズシエンがセイピに来たのかなど…）だんだんわかってくるはずです。
初めての小説ですがぜひ読んでください！

世界への入り口

無数の星々によって織り成された芸術

「星空」。

何気なく夜空を見上げると、その雄大さに圧倒されてどこか威厳すらも感じる。

一見ただの点にしか見えないのだが、よく見ると、明るさ、色、輝きなどすべてが個性的で同じものはない。それは同じ生き物でも固体によって少しずつ異なり、同じ存在は決して存在しないのと同じ理屈である。

さて、もしこの星空を地球外の生命体も見ていたらどうでしょう？

今、もしあなたが星空を眺めていたら、目には見えなくてもあなたを見ている生命体は限りなく存在しているかもしれません。そしてあなたも彼らを見ているのかもしれない。

こんなことを考えているとどこか不思議で、好奇心をそそりませんか？

それは実際に見たことがなくても、99%以上の確率でありえることだとほとんどの人が心のそこで思っているからではないだろうか。そう、世の中の真理というものは目に見える形よりも、目に見えない形で存在しているほうが圧倒的に多いのである。でも目に見えなくても

「存在」そのものはあるのだ。

「存在」そのものは。

この物語は、私たちの太陽系も含むこの天の川銀河のどこかにある恒星系

「ジル恒星系」の第4惑星セイピでのドラマを描いたものである。

そう、このセイピの生き物こそが、目に見えなくても私たちのことを見ている生き物のほんの一部なのだ。

プロローグ： 星降る夜の中で…

ひんやりと冷え切った空気の中、空には満天の星が浮かんでいた。辺りは背の低い草が覆っていて、周りには星の光に照らされて写った山があった。近くに街灯ひとつないはずなのに思いのほか明るくかなりはつきりともものを見ることができた。

そんな中、一台の車が止まっていた。

車のルーフを全開に開けてなにやら星を眺めているようである。

「ねえ、ユウシエン。この星のどこかに私たちみたいに星を眺めている人がいるのかな？」

隣に座っているルビンがユウシエンに問いかけた。すると少し間があつてユウシエンは答えた。

「いるよ・・・」

「ユウシエンが地球にいた頃もこうして星を眺めてたの？」

「そうだよ・・・」

まるで、過去のことを思い返すようにそう答えた。

「もちろん、ペルンスで見る星とでは星の配置が違うけど、星の存在は変わらない。ちょうどあの辺りの星が俺たちの故郷地球がある太陽系の太陽という星だよ」

そついうとユウシエンはカズシエンをみて星空を指差した。カズシエンは、笑みを浮かべてうなずいた。そして、ユウシエンの指差す方向には確かにわずかに明るい星があった。

「あの、暗い星？」

「そつだよ。でも、あれでも地球から見るとものすごく明るいんだよ。ペルンスから見るジルと同じで」

「へえ」

「なんだか、不思議な気分じゃない？自分のいたところを見てるなんてさ。しかも144光年も離れてるから、ユウシエンは地球ではこの光を見たことないんだよ」

ルビンは、そういうと笑った。

「ほんと、不思議だね。」

そういうと、ユウシエンも一緒になって笑った。

ルビンはふと後ろの二人が気になって後ろの席をみた。

「レイン、やけに静かだと思ったらもう寝ちゃったんだ。カズシエンもいつの間にか寝ちゃったし、私たちも寝ましよう」

「そうだな。星を眺めながら寝よう」

ユウシエンはそういうとルーフを閉じクリアルーフ（ルーフは閉じるが外の景色は透けて見える状態にすること。外から見ても何も換わったように見えない。）にして暖房をかけた。

「ありがとう。ユウシエン」

「いえ。おやすみ、ルビン」

暖房の音だけが車の中に聞こえる。ルビンは少し恥ずかしそうに下を向いた

「おやすみ」

下を向いていた顔を上げユウシエンの方を向いて小さくささやいた。

夜が明けるまで星たちは彼らに向かって光を放ち続けたのだろう。彼らがどこで何をしようと星たちはすべて知っている。星たちは自分の光の届く範囲のことをすべて知っている。

そして、星には人と人をつなぐ力もある。

そう。その、淡く優しい光にはさまざまな力があるんだ。

星降る空の中で彼らは眠った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4183d/>

ペルンス

2010年10月25日20時16分発行